

島々の連携による世界ブランドの構築を



昭和22年鹿児島県生まれ。東京大学大学院博士課程単位取得退学。日本近世史、特に薩摩藩を研究。鹿児島大学法文学部教授などを歴任。現在は志学館大学教授、鹿児島県立図書館長、奄美群島振興開発審議会長、奄美観光大使を務める。

奄美群島成長戦略推進懇話会座長 原口 泉

● はじめて自ら描いた群島の将来像

奄美振興の六〇年を振り返ると、公共投資として二兆円以上が投入されてきました。港湾や道路、トンネルなどは必要最小限の社会資本です。大型船が直接接岸できるようになり、名瀬と古仁屋のような離れた地域同士が陸路で結ばれました。集中豪雨などの災害時に、もしトンネルがなかったらライフラインの復旧に何ヶ月もかかったはずですが、問題は、公共工事が島々の生業になってしまったことです。

振興策自体が悪いわけではなく、自発的にチャレンジをして新たに産業を興す機運が失われてしまったわけです。今回の法改正に向けては、この反省の上に立ち、自分たちで一〇年後に奄美はこうなるべきという将来像を描き、それを実現するためにこういう投資が必要といった順序が踏まれています。

リスクとチャンスとチャレンジ——その担い手は、一二の市町村をはじめ奄美群島広域事務組合、大島郡町村会

です。今回、これらが一体となって、はじめて自律的に将来像——「奄美群島成長戦略ビジョン」を策定したわけです。

沖縄には、平成三四年度まで毎年約三〇〇億円を国が交付金として拠出し、農林水産物輸送コストの低減などにも使われます。沖縄も奄美も、同じような亜熱帯性の農産物を移出するとすると、高いほうは売れるわけがない。航路・航空路運賃の補助があつてようやく対等になります。

今回創設された奄美群島振興交付金の二六年度予算は交付税措置を含めて約二六億円。この事業をどんどん活用して、これでは足りないというくらいにならないといけません。

奄美には豊かな自然や歴史遺産、さまざまな資源が手つかずのまま残されています。これらの活用はもちろんですが、最後に残された条件不利性だけは何とかしなければ、皆さん頑張られたのです。

一つひとつは小さくても、連帯したらものすごい力を出すのが奄美の島々です。いまはスタートラインにいたばかり、これから一致団結して走り出さなくてはなりません。

● 苦難の歴史を乗り越えてきた島々

奄美の産品は、平安時代から日本の貴族文化を形づくってきました。たとえば、世界文化遺産に登録された平泉の中尊寺。一二世紀、東北の黄金と、奄美のヤコウガイを大量に使った螺鈿細工らでんである金色堂ができました。また、島津荘の年貢だったピロウの葉は、都の牛車の屋根葺き材です。真言宗や天台宗の密教の儀式にも不可欠でした。平安文化は奄美の物産がなければ、成り立ちませんでした。

そのころの奄美は、独自の操船技術や海軍力を持っていました。一〇世紀には九州沿岸を襲撃しています。また、一二世紀を頂点として、陶器のように硬い焼き物「カムイヤキ」が生産されます。窯は徳之島（伊仙町）にあり、遺物は出水市いずみから与那国島まで分布しています。土器を運ぶには船団いせんが要ります。黒潮を舞台にした一大海洋民族として、積極的な交易活動を展開していたわけです。

しかしその後、一五世紀には琉球王国の大島征伐などがあり、一六〇九年以降は薩摩藩の支配下となります。統治にあたって薩摩藩は「大型船をつくるな」、のちには「貨幣を使うな」と命じ、年貢を米から黒糖に換え、砂糖専売制を強化して島々を搾取していきました。家人やんち（富農に身売りした一種の奴隸身分）が増えて貧富の格差が広がり、徳之島では苛酷な暴政に対する農民の抵抗運動（一八一六年の

母間一揆、一八六四年の犬田布一揆）が起こっています。

明治維新後も圧政は続きます。砂糖販売の自由化を求めて、明治八年からいわゆる「勝手世騒動」が起こり、同一二年にようやく自由売買が実現します。

しかし、造船と貨幣流通を禁じられていた奄美が、いきなり商品市場へ投げ出されたらどうなるか。台風災害による砂糖の減収も重なり、本土商人などの餌食になりました。前貸し支配による借金地獄で、江戸時代よりも苦しい状態になりました。明治二〇年以降、「三方法運動」さんほうほう（不当な借財支払いの拒否、栽培方法の工夫による生産量増加、質素な生活で節約）がはじまり、負債の不当性を法廷に訴えましたが、負けてしまいます。奄美の人たちはここから奮起し、のちに判事や弁護士、学士を多く輩出したのだと思います。教育についても、自ら学校設立運動を行っています。この一連の経緯は、いわば奄美の「自由民権運動」です。

奄美は、時代の変遷のなかで、圧政や差別に対して群島をあげた激しい抵抗運動を起こさざるを得ませんでした。戦後、米軍統治からの祖国復帰運動もそうです。こうした苦難の歴史を財産にしなければ、というのが私の想いでしたし、先人たちの精神遺産を受け継いで、今回のビジョンが策定されたのだと思います。

● ハワイやベトナムに学びたい産業の振興

奄美を、世界の他の地域と比べてみると、新たな位置づけと価値観、可能性までが見えてきます。

まず、ハワイです。一九五九年に合衆国五〇番目の州になり、翌年大統領になったケネディはハワイを太平洋のキーステーションにしようと、ハワイ大学にイーストウエストセンター（アジア・太平洋諸国との相互理解と連携強化を目的とした連邦の研究・教育機関）を設立しました。じつは、沖縄と奄美の基本資料もこの大学にあります。太平洋地域を研究するにはハワイへ行かなければならない。こうした状況を戦略的につくり出し、世界の研究者や観光客のあこがれの地へと発展させていったのです。

それまでは、コーヒーやサトウキビのプランテーションが営まれていたくらいでした。その意味で私は、奄美はハワイのようだと考えていますし、どちらが自然遺産として多様な価値があるかといえは、奄美だと思えます。

続いてベトナムです。第二次大戦後、フランスからの独立をめぐるインドシナ戦争、米国との戦争を経て社会主義共和国が発足（一九七六年）しましたが、中越紛争やカンボジアの侵攻などが続きました。その後、政府はいわば計画経済から市場経済への転換を図るため「ドイモイ（刷新）政策」を導入、いまやサトウキビ生産量は年間一五〇万トン、コシヨウやコーヒー、カシューナッツなどの世界一の輸出国です。長年の戦争で疲弊し、歴史的にひどい目に遭っ

たにもかかわらず、ここまで成長してきたわけです。

奄美では、ベトナムのように大規模営農による生産量の拡大は図れませんが、小規模で付加価値の高い作物を組み合わせることはできます。たとえば、バレイショと畜産、アサイーでも構いません。

いま、沖永良部島や徳之島では、良質のコーヒーをつくっています。品質ではブラジル産に負けません。奄美は小規模栽培で手摘みですが、ブラジルは大規模で機械化されているので悪い実も入ってしまうことがあります。だから苦みでごまかしています。ブラジルでも本場に美味しいコーヒーは甘いのです。

ハワイのコナコーヒーは非常に高価です。手摘みだともっと高くなりますが、もともとハワイにコーヒーなどありませんでした。明治期から日系移民が粘り強く栽培を続けてきたのです。ベトナムも、国家政策で産業の方向性を大きく変えました。つまり、従来の産業構造に依っているばかりではダメだということです。ベトナムに赴任された安栖宏隆氏（国交省の前特別地域振興官）が指摘していたのもこの点です。

● 奄美が目指すべき「アグロフォレストリー」

歴史を緋けば、モノカルチャーのプランテーション農業で奴隷労働を課され、奄美と同じようにひどい植民地支配

を経験してきた地域があります。

ブラジルは、日本でいう幕末の頃に工業化しました。それを支えたのは金とダイヤモンドの採掘、コーヒーと砂糖のプランテーションで、黒人奴隷貿易を永く続けていました。アメリカ南部諸州の綿花やタバコのプランテーションも、黒人奴隷に負っていました。奄美の家人解放は一八七二年、南北戦争の終結（一八六五年）とブラジルの奴隷制廃止（一八八八年）との間です。奴隷制という視点では、奄美もアメリカやブラジルと共通に語る事ができます。

ブラジルには、鹿児島からトメアス（アマゾン川河口の南にある町。同国北部の日本人入植地としてもっとも歴史が古い）に入植し、「アグロフォレストリー」（同じ土地で果樹や農作物を栽培、樹間で家畜を飼育するなど、自然保護型の農林牧畜業）で成功している人がいます。農地を拓かなくても、そのままの森林を使い、あらゆる作物を育てます。単一作物の栽培や牧場経営などと比べて反収も高く、周年的な収益と持続的な経営が可能といえます。

これから奄美が目指すべき農業の一つは、このアグロフォレストリーではないでしょうか。マンゴーの「太陽王（ティダオウ）」やしやぶしやぶ用の生キクラゲ、コーヒー栽培などを組み合わせれば良いと思います。

産品は、必ずしも大消費地ばかりへ送る必要はありません。理由は、各地から大型客船が訪れて来るからです。

南太平洋ポリネシアのタヒチも、ベトナムと同様フランスの植民地となり、プランテーション農業が営まれていた島々です。タヒチ島（面積一〇四二平方キロメートル、人口一三万二三〇九人、一九八八年）は、奄美群島（二二三八平方キロメートル、約一二万人）とほぼ同規模で、いまではロサンゼルスとシドニー間を結ぶ大型客船などが寄航する世界的な観光地になっています。

奄美でも大型船の着く岸壁整備が進み、今年も米国本社の豪華客船「サン・プリンセス号」をはじめ、多くのクルーズ船が寄航する予定です。その人たちにその場で美味しいコーヒーなどを召し上がってもらって、味を覚えてもらえば良いと思います。

● バリ島にも劣らない豊かな文化遺産

インドネシアのバリ島には、非常に濃いインドゥー文化が残っています。一九二〇年代、宗主国だったオランダがその点に着目し、観光開発が始まります。

伝統芸能と舞踊、音楽、島唄、民芸品、海岸保養地——バリ島の説明と思われるかもしれませんが、奄美も同じです。アート、ミュージック、スポーツ、修学旅行、グリーンツーリズム、エコツーリズム、戦争・平和学習——なんでもできます。奄美はまったく劣っていません。むしろ上をいっています。

たとえば、徳之島の闘牛は、人間同士の対立を文化にまで高めていった証拠です。島唄も、優しさと悲しさと激しさを合わせ持っています。それだけに魅力は尽きません。

国内では奄美だけに製造が許されている黒糖焼酎は、世界の蒸留酒の中でも独特の存在感があります。ドイツでの試飲会も大好評でした。日本に清酒や泡盛など多様な酒があるのは、カビや麹など世界の真菌の二三パーセントが棲息する列島だからです。世界でもっとも生物種が多い（約九万種）のも日本列島です。台風が黒潮とぶつかり、環境を豊かにしてきたためという説があります。

また、身の回りにケムンや、やちや坊といった精霊たちもいます。水木しげるの世界が現実にあるのです。自然保護という西洋の人間中心的な自然観ではなく、あらゆるところに神々が宿り、自然に生かされているというアニミズムの思想です。現代の人間が失ってしまった世界観です。バリ島には古代ヒンドゥーの文化が色濃く残っています。ハワイだってカメハメハ王国の伝統文化があったからこそ世界有数の観光地になったわけで、ベトナムもおそらくそうだと思います。独特の精神性を含めた貴重な文化資産の活用が、これからの観光を考える際には必要でしょう。

●「自然は見るもの、学ぶもの」という思想

日本最初の国立公園指定は、昭和九年です。まず霧島や

雲仙、瀬戸内海が指定され、すぐに阿寒や阿蘇、日光などが追加指定されました。これらに共通しているのは、美しい景勝地、温泉保養地という点です。日本人の観光客だけではなく、外国人を視野に入れた国際観光、つまり外貨を稼ぎ、国威を発揚させるという思惑があったわけです。

明治期、農商務省の次官などを務めた薩摩出身の前田正名まさなという男がいます。その功績から、沖永良部島には正名という集落名がつけられたほどです。彼は若いころ、フランスとスイスに八年間留学しています。普仏戦争に敗れ、混乱の中で共和制が始まり、農業を基盤にしながら復興していくフランスの姿を見て、農政思想を身につけました。

彼は、日本人が真に富裕化するためには農工並進で行かなければいけない。漆器業や絹織物業などの地場産業、伝統工芸なども並行して発展させなければ、という考えをもっていました。そのため、政府の政治家で工業政策一辺倒の松方正義と対立し、ついには政界を追放されてしまいます。

のちに前田は、阿寒湖周辺の国有林の払い下げを受け、釧路で製紙会社を営みます。ところが晩年になって、森は伐るものではなくて見るものだという考えに変わりました。鹿兒島の貧乏武士がヨーロッパの美しさに感動を受け、自然の景観的価値をはじめて提唱したのです。彼の財産をもとに前田一歩園財団が誕生し、いまでも阿寒国立公園は維持されています。

私も、奄美の自然は見るもの、学ぶものであり、これからの地域の社会的資本は自然生態系だと思っています。

自然の豊かさや生物多様性は、歴史に裏打ちされた文化財ととらえることができます。名瀬と龍郷を結ぶ本茶峠などは、トンネルを通すことによって旧道が自然観察道になり、結果的に生態系への影響を最小限に抑えることができます。固有種のアマミノクロウサギも、適度に人間の手が加わって殖えてきたわけです。

● 分断から脱し、広域連携と情報発信を

奄美は、永くヤマトと沖縄の谷間にあり、島々が分断されてきました。見えないだけに厄介な問題ですし、チャレンジとイノベーションの足かせになっていました。

しかし、やつとその鎖を断ち切って一つになり、各島での討論によって積み上げたビジョンとして、自ら一〇年後の姿を示すことができました。

交通手段が拡充した現代においては、文化や魅力の差別化が必要です。南はカリマンタン島やジャワ島、北はカムチャツカ半島に至る環太平洋という広域な範囲で、それぞれの地域が差別化を図る意識を持たなければいけません。

かつて、作家の島尾敏雄が日本列島を島々の連なり「ヤポネシア」と捉え、トカラ列島も含めた文化圏「琉球弧」という概念を提起されました。われわれはそれを踏まえ、

分断ではなく「連帯」を意識する必要があります。

沖縄との連携が重要です。いま、全国の物産は、那覇をハブ空港にして香港や上海、東南アジアへ輸出されています。この地理的条件をもっとも上手く使えるのは奄美だと思います。ビジョン策定に際し、琉球大学の古城肇学長が座長代理としてこの点を強調されました。

ハワイは、オアフ島だけではなくマウイ島やハワイ島すべてが潤っています。バリ島も、バリ州全体が潤っています。一方、奄美の島々は、これまでお互いが対立せざるを得ない状況に追いやられてきました。たとえば、昭和初年ごろ、沖永良部島でユリ根騒動がありました。取引商社をめぐって住民同士が対立した厳しい闘争でした。

これから実施計画づくりとその実行段階に入るわけですが、そこで本当の困難にぶつかります。発展を阻害してきた要因を取り除いていかねばなりません。安栖氏が言うように、「変革とリスクを恐れずに挑戦」していくべきです。

奄美は今年、国立公園に指定される予定です。その後は、沖縄とともに世界自然遺産登録を目指して準備が進められています。奄美の森は世界の恋人、ヤマトの母なる地——。さまざまなキャッチフレーズが思い浮かんできます。まさに、世界ブランド構築に向けての絶好のチャンスです。これからは八つの有人島が連携しつつ、それぞれ世界に情報を発信してほしいと思います。